

養護学校卒業生（精神遅滞）の アフター・ケアに関する研究 ——青年学級出席状況の分析をとおして——

大野 由三* 宮本 文雄** 井田 範美***

養護学校（精神遅滞）では、卒業生を卒業後もなんらかの係わりをもって指導する場合が多い。青年学級もその具体的方策の一つである。

本研究では、この青年学級の在り方を追究するため、養護学校で実践されている青年学級を取り上げた。今回の主な研究目的は、青年学級の活動内容と出席状況との関係及び個人別出席状況を分析し検討することにある。分析資料は9年間の青年学級出席簿等であり、出席率の高い一部の者については、面接調査を行った。

主な結果としては、出席状況と活動内容とは密接な関係にあること。年間出席回数の少ない者の割合が多いこと。9年間、一定の者がよく出席しており、中、軽度の障害の者が多いこと。又、出席の目的として、友達と話し合えることを第一に挙げていることなどである。

出席者にとって、青年学級は必要であり、生涯教育の重要な場となっていることが分かった。

キーワード：養護学校（精神遅滞） アフター・ケア 青年学級 生涯教育

1. はじめに

学齢期の精神遅滞児教育については、1979（昭和54）年度から養護学校教育の義務制が施行され、整備、充実してきている。これに対して、卒業後の教育的対応はまだ充分とはいえない。

このような状況にあって、養護学校（精神遅滞）の卒業生に対するアフター・ケアは、円滑な社会的自立を図る上で、重要な役割を負っている。

山口ら（1986）の調査では、1978（昭和53）年以前に設立された全国の養護学校（精神遅滞）の82.3%が、なんらかのアフター・ケア体制を校内組織に位置づけており、更に、具体的な取り組みとして、「青年学級」を位置づけている学校は、その内、20.8%に上っていると報告している。

一方、東京都は1969（昭和44）年度に社会教育

における心身障害者教育に取り組み、盲、ろう、養護学校（精神遅滞）、3校の卒業生を対象とした青年教室（東京都の呼称）を開設している。以後、1974（昭和49）年度には「都立盲、ろう、養護学校の開放」という名称に変え、青年教室の拡大充実を図ってきている。また、東京都教育庁社会教育部（1981）によれば、区市町村レベルでも、1964（昭和39）年墨田区の「すみだ教室」を嚆矢として心身障害者の青年教室を開設しているところは多い。

ところが、現在、各地の養護学校（精神遅滞）で開設されている多くの青年学級は、地方自治体が直接関与するというより、学校が必要に迫られ、独自に実施している場合が多いと推測される。開設の主体がいずれであっても、青年学級はアフター・ケアの場としての役割だけでなく、卒業生が仲間と一緒に余暇を楽しく有意義に過ごし、社会生活をする上で必要な知識、技能、態度を身につけていく生涯教育の場としての役割の二面性を

* 上越教育大学障害児教育講座

** 筑波大学学校教育部

*** 筑波大学心身障害学系

Table 1 卒業年度別人数

卒業年度 性 部	'58	'59	'60	'61	'62	'63	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71	'72	'73	'74	'75	'76	'77	'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85	'86	計
中男	7	2	5	7	8	8	3	5	6	8	8	5	4	5	1	1	0	0	0	0	0	3	0	0	2	0	0	1	0	89
学女	3	2	3	3	6	3	3	7	4	3	3	2	1	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	49
部計	10	4	8	10	14	11	6	12	10	11	11	7	5	6	2	1	1	0	0	0	0	4	0	0	4	0	0	1	0	138
高男							4	4	5	2	3	4	9	3	8	8	8	10	6	9	8	4	10	4	3	6	5	2	6	131
等女							3	4	8	4	5	7	1	4	6	6	5	6	8	6	7	9	6	5	5	6	4	5	5	125
部計							7	8	13	6	8	11	10	7	14	14	13	16	14	15	15	13	16	9	8	12	9	7	11	256

※ 中学部卒業生の人数は高等部進学者を除いた人数である。

担っているように考えられる。

現状では、青年学級に対する教育的対策は遅れているだけでなく、これに関する基礎的、実証的な研究は皆無といって過言ではない。

本研究では、アフター・ケアの一環としての青年学級の意義、性格、運営等の在り方を追究するために、具体的実践例をもとに分析、検討する。その実践例として、筑波大学附属大塚養護学校と在校生、卒業生の親が組織している「桐親会」(社団法人)が開催している青年学級を取り上げて検討したい。この青年学級は1967(昭和42)年4月、卒業生とその親たちからの強い要望と学校側の卒業生対策の必要性から発足したものである。当初から、原則的に月1回、第3日曜日を充て、学校の施設、設備を使用して開講している。指導者は、学校の教職員を中心にして、外部から、ボランティアの協力を得て実施している。

今回の研究目的は、過去9年間の青年学級の活動内容と出席状況との関係及び個人別出席状況の実態を分析し検討すること、及び、出席率の高い者の要因を明らかにすることである。

2 方 法

(1) 対象

筑波大学附属大塚養護学校中学部卒業生と高等部卒業生及び修了生である。

(2) 年間活動計画

月1回開講する青年学級の年間活動計画はTable 2に示す。

※ クラブ活動は、野球、生花、造花、お茶、ソロバンの5種目である。野球を除く4種目は、主にボランティアの方の指導である。

※ 6月の学習は社会生活に必要な知識、技能や教養、趣味的な内容で、小遣いの使い方、手紙

Table 2 活動内容

内 容 月	活 動 内 容
4 月	開講式 クラブ活動
5 月	遠足(日帰りハイキング)
6 月	学習 クラブ活動
7 月	水泳練習 クラブ活動
8 月	ボーリング クラブ活動
9 月	学校の運動会参加
10 月	野外料理 クラブ活動
11 月	学校の学芸会参加
12 月	クリスマス会 クラブ活動
1 月	成人式 新年会 クラブ活動
2 月	映画鑑賞 クラブ活動
3 月	クラブ活動 反省会 開講式

の書き方、時事問題等多様である。

※ Table 2以外の活動としては、他の青年学級との交流のための球技大会、弁論大会への参加、社会的視野を広めるための研修旅行が組まれている。

※ 8月のボーリングは1984年から組み入れた行事で、それ以前は水泳である。その他の変更はなく、この活動が基本的な形となっている。

(3) 資料の収集

青年学級の出席簿より資料を収集した。又、出席率の高い者(年間6回以上出席した者、以下、高出席者と呼ぶ)の一部については面接調査を行った。

3 結 果

(1) 月別出席状況の分析

Table 3 月別出席者数

年 \ 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	年間出席者数
1979年	48	24	47	38	33	32	46	18	39	38	36	40	439
1980年	59	19	50	47	28		53	31	48	35	36	42	448
1981年	45	24	45	34	35	20	58	32	36	43	42	35	449
1982年	50	24	43	36	25		58	36	38	37	41	33	421
1983年	32	15	31	32	27	16	40	26	30	17	31	23	320
1984年	32	14	33	28	22	24	38	21	34	30	37	25	338
1985年	36	17	31	27	26	16	42	31	29	31	23	34	343
1986年	32	15	44	29	24	30	39	28	38	35	34	34	382
1987年	39	13	39	73	40	37	38	31	32	44	34	29	449
月別合計	373	165	363	344	260	175	412	254	324	310	314	295	3,589

9年間の月別出席状況を調べたのがTable 3である。この表より、9年間、比較的、出席者の多い月と少ない月を明らかにするため、月の平均出席数（年間出席者総数÷年間回数）を算出（299.1人）し、便宜的ではあるが、この数値を一応基準

にして、上回る月を、比較的出席者の多い月とし、又、下回る月を少ない月とする。この結果、出席者の多い月は、4月、6月、7月、10月、12月、1月、2月の7カ月であり、少ない月は、5月、8月、9月、11月、3月の5カ月である。

Table 4 累積卒業生数

卒業生数 年度	中 学 部 卒 業 者			高 等 部 卒 業 者			男 女 (合計)		
	男	女	(小計)	男	女	(小計)			
1978年度	83	46	(129)	91	80	(171)	174	126	(300)
1979年度	86	47	(133)	95	89	(184)	181	136	(317)
1980年度	86	47	(133)	105	95	(200)	191	142	(333)
1981年度	86	47	(133)	109	100	(209)	195	147	(342)
1982年度	88	49	(137)	112	105	(217)	200	154	(354)
1983年度	88	49	(137)	118	111	(229)	206	160	(366)
1984年度	88	49	(137)	123	115	(238)	211	164	(375)
1985年度	89	49	(138)	125	120	(245)	214	169	(383)
1986年度	89	49	(138)	131	125	(256)	220	174	(394)

Table 5 年度別出席者数

出席者数 年度	中 学 部 卒 業 者			高 等 部 卒 業 者			男 女 (合計)		
	男	女	(小計)	男	女	(小計)			
1979年度	11	1	(12)	31	36	(67)	42	37	(79)
1980年度	15	3	(18)	44	44	(88)	59	47	(106)
1981年度	10	2	(12)	44	37	(81)	54	39	(93)
1982年度	10	3	(13)	42	36	(78)	52	39	(91)
1983年度	12	6	(18)	25	28	(53)	37	34	(71)
1984年度	9	4	(13)	26	26	(62)	35	40	(75)
1985年度	8	3	(11)	26	32	(58)	34	35	(69)
1986年度	9	4	(13)	33	34	(67)	42	38	(80)
1987年度	11	6	(17)	37	40	(77)	48	46	(94)

このように、月によって、出席者の人数に増減があることが明らかとなったが、これは、どのような原因から起るのか、特に、Table 2の月々計画されている活動内容との関係については検討の必要があるように考えられる。

(2) 年間出席状況の分析

① 出席率の傾向

卒業年度別人数はTable 1に示す通りである。これより、1979年度から1987年度までの9年間の累積卒業生数(卒業生の延人数)を求めるとTable 4のようになる。

次に、出席者数(年間1回でも出席した者)をまとめるとTable 5のようになる。この表から出席者数を見ると、1980年度を頂点として、以後、漸次、減少し、1985年度が最低となり、1986年度より再び、増加の傾向に転じているのが分かる。

Table 4とTable 5より出席率(出席者÷累積卒

Table 6 出席率

出席率 年度	出 席 率
1979 年 度	26.33 (79/300)
1980 年 度	33.44 (106/317)
1981 年 度	27.93 (93/333)
1982 年 度	26.61 (91/342)
1983 年 度	20.06 (71/354)
1984 年 度	20.60 (75/364)
1985 年 度	18.40 (69/375)
1986 年 度	20.90 (80/383)
1987 年 度	23.90 (94/394)

() 内は実数

Table 7 出席回数率

年度	出席回数率
1979 年度	12.19 (439/3600)
1980 年度	12.85 (448/3487)
1981 年度	11.24 (440/3986)
1982 年度	11.19 (421/3762)
1983 年度	7.53 (320/4248)
1984 年度	7.70 (338/4392)
1985 年度	7.62 (343/4500)
1986 年度	8.31 (382/4596)
1987 年度	9.50 (440/4728)

() 内は実数

業者数×100)を調べてみるとTable 6のようになる。この表から見ると、Table 5の傾向と同様に、1980年度が最高の出席率で以後、次第に減少し、1985年度が最低となり、1986年度から上昇傾向が見られる。以上のような年度による増減減少はなにかから起るのか、その原因を分析してみる必要がある。

⑥ 出席回数率の傾向

Table 3の年間出席者総数と累積卒業生総回数(累積卒業生数×年間回数)で出席回数率を見てみるとTable 7のようになる。この表から見ると1983年度以後、特に、出席回数率が減少しているのが分かる。しかし、その傾向の中でも、1986年

Table 9 高出席者率

年 度	出席回数	7 回以上	6 回以下
1979年度		41.77 (33)	58.23 (46)
1980年度		31.13 (33)	68.87 (73)
1981年度		33.33 (31)	66.67 (62)
1982年度		30.77 (28)	69.23 (63)
1983年度		25.35 (18)	74.65 (53)
1984年度		24.00 (18)	76.00 (57)
1985年度		36.23 (25)	63.77 (44)
1986年度		32.50 (26)	67.50 (54)
1987年度		37.23 (35)	62.77 (59)

数値は%, () 内は実数

度からは、幾分上昇傾向も見られる。

Table 6より、1980年度は出席率が高かったが、出席回数率より見ると、1979年度から1982年度の4年間は余り差が見られない。即ち、1980年度は出席者が多かったが、年間出席回数は少なかったことを示している。

⑦ 個人別年間出席回数の傾向

1983年度以後の出席回数率の低下について、各個人の年間出席回数より調べてみる。

各個人の年間出席回数を6段階で分類してみると、Table 8のようになる。この表より、各年度、年間1～2回の出席者が一番多いことが分かる。

更に、Table 8より、年間7回以上出席した者と

Table 8 年間出席回数

出席回数		1～2回	3～4回	5～6回	7～8回	9～10回	11～12回
年度							
1979	年 度	30.38 (24)	12.66 (10)	16.46 (13)	16.46 (13)	16.46 (13)	8.86 (7)
1980	年 度	48.11 (51)	6.60 (7)	14.15 (15)	17.92 (19)	11.32 (12)	1.89 (2)
1981	年 度	38.71 (36)	11.83 (11)	16.13 (15)	13.98 (13)	10.75 (10)	8.60 (8)
1982	年 度	37.36 (36)	16.48 (15)	15.38 (14)	15.38 (14)	9.89 (9)	5.49 (5)
1983	年 度	35.21 (25)	22.54 (16)	16.90 (12)	7.04 (5)	15.49 (11)	2.82 (2)
1984	年 度	41.33 (31)	21.33 (16)	13.33 (10)	6.67 (5)	8.00 (7)	9.33 (7)
1985	年 度	33.33 (23)	21.74 (15)	8.70 (6)	18.84 (13)	10.14 (7)	7.25 (5)
1986	年 度	38.75 (31)	17.50 (14)	11.25 (9)	10.00 (8)	13.75 (11)	8.75 (7)
1987	年 度	41.49 (39)	11.70 (11)	9.57 (9)	17.02 (16)	13.83 (13)	6.38 (6)

数値は%, () 内は実数

Table 10 年間平均出席回数別人数

出席回数	年 間 性	9年間	8年間	7年間	6年間	5年間	4年間	3年間	男女別 計	合 計
11～	男									1
	女	1							1	
10～	男	1	1					1	3	4
	女	1							1	
9～	男	3							3	5
	女	1		1					2	
8～	男	1							1	3
	女	1				1			2	
7～	男	3							3	6
	女	3							3	
6～	男	2							2	6
	女	2	1				1		4	
5～	男	3						1	4	8
	女	1	1		2				4	
4～	男	4							4	8
	女	3						1	4	
3～	男	5	1				1	2	9	13
	女	2			1	1			4	
2～	男	3	2					1	6	10
	女		1	1		1		1	4	
1～	男	6	3	3				2	14	28
	女	8	4			1	1		14	

6回以下の出席者に分けて、9年間の結果を見ると、Table 9のようになる。これによると、年間出席回数が6回以下の者は、1979年度を除き、60%以上を占めている。特に、1983年度及び1984年度はこの割合が高く、年間出席率の低下の要因になっている。反対に、7回以上出席した者は1983年度、1984年度を除き、30%以上を占めて、対照的な結果を表している。

(3) 高出席者の分析

① 高出席者の抽出

Table 10は、年間別による年平均出席回数的人数を示したものである。これによると、年平均6回以上出席した者25名中、9年間の者は19名（男10名、女9名）で76%を占めている。即ち、1978年度以前の卒業生が多くを占めていることが分かる。同様に、平均5回以下の出席者は67名いるが、その内、9年間、平均5回以下の者は35名(52%)

である。このことから、青年学級に出席している者の内、1978年度以前に卒業した者の占める割合が高いことが明らかである。この傾向は特に、よく出席する高出席者で顕著であり、一定してよく出席する者が多いことを示している。このことは、

Table 11 年齢段階別人数

年 齢	性	男	女	計
21～25		1(8)	2(15)	3(12)
26～30		3(25)	5(39)	8(32)
31～35		5(41)	5(39)	10(40)
36～40		0	1(8)	1(4)
41～45		3(25)	0	3(12)
計		12(100)	13(100)	25(100)

() 内は%

よく出席する者が固定化してきているとも考えられる。

⑤ 高出席者の状況

年平均6回以上の高出席者25名について、歴年齢、知能段階(卒業時の検査による)、勤務先別に分類して、その傾向を明らかにする。

歴年齢(1988年3月末日現在)の分布状況を示したのがTable 11である。最年長者は45.0歳、最低年齢の者は21.1歳であり、20歳台11名、30歳台11名で多く、40歳前半の者も3名いて、年齢幅が非常に広いことを示している。

又、知能段階(鈴木ビネー式個別知能検査法による)を示すと、Table 12のようである。これによると、中、軽度の障害の者が多いことが分かる。

次に、勤務先別に見ると、Table 13のようである。男は圧倒的に会社勤務が多く(92%)、女も比較的、会社勤務が多い(46%)のが特徴である。

⑥ 高出席者の出席要因

青年学級によく出席する者の要因を探るため、出席の目的、興味の所在、休日の過ごし方について面接調査を行った。調査期間は昭和61年9月～11月、対象者は男7名、女5名の計12名であり、無作為に抽出した。その内訳として、歴年齢は45歳～21歳、勤務先は会社9名、作業所3名である。

(回答は複数回答による)

出席の目的としては、「友達がいるから」が11名で一番多く、次いで、「職場で出来ないことが出来る」「いろいろな先生方に会える」が各2名、「会社で嫌なことがあっても忘れる」が1名であった。

青年学級の活動内容の内、なにが面白いのか、その興味の所在に対する質問では、「クラブ活動」8名、「各種の学習」1名、「回答なし」3名という結果であった。

青年学級以外の休日の過ごし方については、「テレビを視る」「音楽を聴く」「家の手伝い」の3項目について、各3名ずつであり、「一人でトランプをする」「料理学校に行く」「友達と野球をする」が各1名ずつという結果であり、大部分の者は家の中で過すことが多いようである。

4 考 察

(1) 月別出席状況と活動内容の検討

月々、開講される青年学級における活動内容の基本的な形はTable 2に示した。この活動内容は9年間、ほぼ同じである。これによると、活動内

Table 12 知能段階別人数

性 知能段階	男	女	計
30～	1(8)	0	1(4)
40～	1(8)	7(54)	8(32)
50～	3(25)	4(31)	7(28)
60～	4(33)	2(15)	6(24)
70～	3(25)	0	3(12)
計	12(100)	13(100)	25(100)

() 内は%

Table 13 勤務先別人数

性 勤務先	男	女	計
会社	11(92)	6(46)	17(68)
作業所	1(8)	5(38)	6(24)
家事手伝い	0	2(15)	2(8)
計	12(100)	13(100)	25(100)

() 内は%

容は、レクリエーション的活動、身体運動に関する活動、趣味・教養的活動、日常生活に必要な知識・技能を習得する活動、各種の学校行事への参加等、凡そ、5つの活動分野に分類される。これは藤島(1985)が挙げる青年学級の目標、活動内容とほぼ相似しているものである。上記の活動内容と出席状況とは、いかなる関係にあるかを明らかにする必要があるだろう。そのため、月々の活動内容を更に吟味してみることが、関係要因を探る上で大切になってくると思われる。

まず、3の(1)に示した出席者数の比較的小さい月の活動内容を見てみたい。

5月は学校を離れ、近郊の山野を歩くことが主体の活動であり、そのため、後に疲労が残ることが災いしていると考えられる。その上、集合場所が変わるため、送迎のための付き添いの必要な者も出てきて、一層、抵抗感が強いことが考えられる。似たようなケースとしては、8月も同様である。この月は気温が高いことも要因に加えられる。

9月、11月の運動会、学芸会等学校行事への参加では、在校生中心で、演技種目の中に卒業生の出演種目が少なく、どうしても受動的参加になりがちなのが原因となっていると思われる。又、3月は式、反省会等、どちらかというと静的、受

身的活動が主体になり、これを避けたものと考えられる。

一方、出席者が極端に多い10月は、桐親会主催のバザーが同時に開催されるため、家族と一緒に参加できること、及び、料理活動そのものへの人気が出席を促しているものと思われる。その他の出席者の多い月の活動特徴を探ると、一様に、クラブ活動が当日のプログラムに入っていて、自分の好きな活動に取り組めること、楽しい行事が組まれていることが共通となっている。

以上のように、出席者の少ない月の特徴としては、疲労感が残り、職業生活に影響を残す活動、見る、聞く、話し合う等の静的、受動的な活動は敬遠されがちになること。又、出席者の多い月の特徴としては、出席者自身、興味ある内容で、主体的、能動的に取り組める活動がプログラムの中心にあることが指摘できよう。

これらのことから、活動内容と出席状況とは、関係あると推測できるが、どの程度かについては、今後、更に、資料を集めて分析、検討の必要がある。

(2) 出席率と出席回数率の検討

出席率は1980年度を頂点として、以後、減少し、1985年度で最低となり、再び、1986年度から上向きの傾向を示していた。同じような傾向は出席回数率でも見られる。

この傾向の最大の要因は、数年続いた校舎の増改築が考えられる。狭い校舎及び校庭を、やりくりしながら活動を展開せざるを得ない状態が継続すると、出席者の活動意欲の低下になり、欠席に連がって表れた現象と見るのが一番妥当な見方ではなからうか。即ち、環境状況の悪化が出席者の減少に直接関係したということである。

58年度以後の出席回数率の低下の原因も同様に考えられる。それは年間出席回数の少ない者が多くなっていることから推測できる。

又、出席率、出席回数率とも、1980年度を頂点として以後低くなっているが、これは、卒業生の増加に比例して出席者が増加しないことも一因と見られる。

(3) 高出席者の検討

青年学級によく出席する者は、1978年度以前の卒業生の占める割合が高く、しかも、一定の者が多いことが明らかになった。

この高出席者25名を調べると、暦年齢は20歳台、

30歳台が最も多いが、40歳台もあり、年齢幅が広い。障害も中、軽度で比較的軽く、男女共、一般就労をしている者の割合が非常に高いことが特徴的である。

高出席者の出席目的で一番多いのは、「友達がいるから」(92%)である。これは休日に、家で一人遊びをして過ごす者が多いという回答を裏付ける結果となっている。彼らには家庭でも職場でも、一緒に語り合え、遊べる兄弟や友達が余りいないので、青年学級に、それを求めて来ている様子が見える。又、なかには職場で出来ないこと、学べないことを青年学級の実現したり、獲得したりしようとしている。即ち、生涯教育の場としての位置づけを考えている者もいる。更に、職場のフラストレーション解消の場として考えている者もあり、青年学級の二面的な役割が明確に浮き彫りにされる結果となった。

青年学級の活動内容の内、クラブ活動が一番、関心が高いことが分かった。これは3の(1)の結果とも一致している。職場の環境と対比して、自分の好きな活動を楽しむことが、非常に魅力になっていることを、この結果は、如実に物語っている。以上のことから、彼らにとって、青年学級は、社会生活、職業生活をする上で、掛け替えのない存在となっていることが実証されよう。

4 ま と め

養護学校(精神遅滞)では、卒業生を卒業後も完全に切り離せない状況にあるため、なんらかの係わりを持ち、指導が行われてきた。青年学級もその一例であり、学校教育の延長のような形とも見える。

これが近年、地域によっては、社会教育法及び青年学級振興法に基づく青年学級として、社会教育の分野に位置づけられてきている。このことが社会教育行政によって、積極的に取り組まれてこなかった理由の一つとして高橋(1985)は、障害者問題が主に社会福祉行政の課題であることとらえる発想が根深く存在してきたことを指摘し、発想の転換を求めている。一方、臨時教育審議会の答申(1987)では、生涯教育の必要性が強調されている。このような現状において、精神遅滞者の卒業後の教育的対応は強く要請される問題となっている。

本研究の結果でも、学習の場としての青年学級

は必要であり、有効な役割を果たしていることが明らかとなった。今後、様々な実践的取り組みと、それを通しての研究が盛んに行われる必要があり、その成果を期待したい。

なお、本研究で残された課題の主なものとして、一定してよく出席する者について、どうしてよく出席するのか、対象者を拡大して検討すると共に、出席回数の少ない者、全然、出席しない者について、その原因を検討することが必要であろう。更に、本研究で取り上げた青年学級の主な課題としては、第一に、9年間、殆んど変更することなく同じ活動内容を組んできたが、これで出席者のニーズに十分対応しているかどうか検討すること。

第二に、松本(1985)の指摘のように、出席者の高齢化と年齢差に、どう対応していくか検討することである。

これらの課題は、精神遅滞者の青年学級をより充実、発展させる意味からも重要なことと考えられる。

文 献

- 1) 藤島岳(1985)：学校教育体制の再検討，発達
の遅れと教育；327，15.
- 2) 小出進(1985)：青年期における教育的対応，
発達障害研究，7(3)，172—173.
- 3) 松本芳信(1985)：青年学級における活動と課
題，発達遅れと教育，327，58—61.
- 4) 文部省大臣官房(編)(1987)：臨教審答申総
集編，文部特報，1327，210—214.
- 5) 高橋正教(1985)：障害者社会教育の現状と課
題，障害者問題研究，41，33—37.
- 6) 東京都教育庁社会教育部(1981)：社会教育に
おける心身障害教育—現状と課題—，3—32.
- 7) 東京教育大学附属大塚養護学校桐親会(編)
(1977)：青年学級十周年記念小史，桐親会，
18—64.
- 8) 山口薫他(1986)：養護学校における生涯教育
をふまえた後期中等教育の調査と実践研究，
昭和60年度科学研究費補助金(一般研究A)
研究成果報告書，26—28.

Summary

A Study on After-Care of the Graduates from the School for Mentally Retarded Children —Through Analysis of the Attendance at the Adult Class—

Yoshizo Ōno Fumio Miyamoto Noriyoshi Ida

In many instances, the schools for mentally retarded children extend various forms of guidance to the graduates. The adult class is one of the specific measures for such guidance.

In the present study, in order to pursue the way the adult class should be, the adult class of a school for mentally retarded children was taken up, and analysis and examination were made of the condition of attendance, with interviews of some attendants.

As a result, it was found that the attendance and activity were closely related to each other. The attendants of a relatively low rate of attendance throughout the year comprised a considerable part. A certain group of persons were attending relatively well for nine years and they were comprised of persons to a medium or light degree. And, as the purpose of attendance, they cited that they could talk with their friends.

It was also found that the adult class would be necessary for the mentally retarded and be an important place of life-long education for them.

Key Word : school for mentally retarded children after-care adult class life-long education